



## 九 大王たちと王子たちへ

---

あれ以来、大王にも王子にも会っていない。毎日のようにトイレに行くけれど、たまり水からは何も登場しない。私は小学生を卒業し、大人になり、おじいさんになった。大王たちが食べ物を消化し、栄養素を吸収してくれているおかげだ。私と同じように、大王たちも同じように齢をとったのだろうか。おじいさんになった大王や王子に一度会ってみたい。年齢を重ねても大王や王子と呼ばれているのだろうか。おじいさん大王やおじいさん王子と呼ばれているのか。何だか可笑的。そう言えば、父や母は、私が大人になっても、「食べすぎには気をつけなさいよ」「好き嫌いはダメですよ」「野菜をもっと食べなさいよ」「食べ物をもっと大事にしなさいよ」、と私の顔を見る度に言ったものだ。その同じ言葉を、私も子どもたちや孫たちに会うたびに言い続けている。その父も母も今はいない。

「おじいちゃん。ただいま」

孫の大介が保育所から帰って来た。

「おやつ、ない？」

「ああ、あるぞ。大介の好きなドーナツだ。オレンジジュースもあるぞ」

「やったあ」いきなりドーナツをほうばる大介。

「こらこら。ちゃんと、手を洗わないと。それに、そんなに慌てないで、ゆっくりと食べなさい。お腹がびっくりするぞ」

「びっくりするって、お腹の中に誰か住んでいるの？」

「どうしてそんなこと言うんだい？」

「だって、ドーナツに会って、びっくりするんでしょう？」

「ああ、そうだな。大介のお腹の中にはうんこ大王とおしっこ王子が住んでいるぞ」

「誰、それ？」

「大介の一生の友だちだ」

「ふーん。それなら、その友だちの分もドーナツを食べないと」

大介はもう一個、ドーナツを掴んだ。私は大介のお腹の中の、まだ保育園児のうんこ大王と保育園児のおしっこ王子に向かって、これからも大介をよろしく、と心の中でお願いした。大介は二個目のドーナツを食べ終わると、オレンジジュースを一気に飲みほした。